

『満漢並香集』訳注（一）＊

荒木 典子

提要

《並香集》为尚玉章将《雅趣藏書繡像西廂時藝》（錢書根據《西廂記》所做的“遊戯八股文”）翻译成滿文的滿漢合璧書，现仅有其抄本收藏于日本京都大學人文科學研究所。漢語小說翻譯的高峰階段为順治、康熙年間。由于其序为雍正二年（1724）所作，因此《並香集》問世的时间稍晚一些。此外，《並香集》不同于其他翻譯作品，它将改作成八股文的作品翻译成了滿文，在这点上可谓独放异彩。希望通過对《並香集》的译注，考察滿漢翻譯文化的一个側面。

はじめに

『京都大学人文科学研究所漢籍目録』に拠ると「満漢並香集、清 錢書撰 清 尚玉章 譯 抄本」という滿漢合璧の抄本全四冊が所蔵されている¹。ウェブ上で全文を閲覧することができる²。これ以外の所蔵は確認されておらず、取り上げている先行研究も見当たらない³。序も滿漢合璧で「錢書の作った西廂時藝二十篇が素晴らしいので翻訳し、『並香集』と題した」とあり、末尾に尚玉章の署名がある。錢書が作ったという「西廂時藝二十篇」とは『繡像西廂時藝雅趣藏書』（以下『西廂時藝』）のことを指す。「時藝」とは黄強 2009 でいう「遊戯八股文」のことである。幼少の頃から八股文の訓練を受けていた明清時代の文人たちが遊びで作ったもので、八股文の形式や要素を用いた、俗文学に属する小品文である。当時は「時藝」の他「制義」「小品制文」などとも称されていた（黄強 2009:104）。『西廂記』も遊戯八股文が作られるほどよく知られた物語であった⁴。

『西廂時藝』は自序に「吳門錢書西山氏」と署名がある⁵。自序の他、鄭鵬舉、徐鵬、陳玉の序がある。国会図書館や早稲田大学に所蔵されており、自序、陳序には康熙癸未（42、1703 年）とある。『西廂記』の各章から一節

を取り出して八股文の「題」とし、全 20 篇の八股文が収録されている（篇に番号は振られていない）。各篇冒頭の一葉は、表に一幅の絵（「繡像」と冠するのはこのため）、裏には『西廂記』の該当する章の内容に沿った詩詞がある。

試みに『西廂時藝』と『並香集』の漢文部分を比較してみると後者に章番号が振られている他には多少の文字の異同はあるものの概ね一致しており、これを底本に満文訳を付したものが『並香集』と考えてよさそうである。毎回、八股文形式の「題」の前に詩詞があるがそれも一致し、満文訳を付している。他の満漢合璧本と同様、満文の規則通り左から右に読ませ、漢文もそれに従う。すると次のようなねじれが生じる。右から左へ進行する『西廂時藝』では「題」の前の冒頭の韻文が詞の場合、末尾に「右詞○○」と詞牌名を記している。『並香集』は左から右に進行するので詞は詞牌名の左側に配置されるが漢文は“右詞 ○○”のままである。対訳の満文は実際の配置通り dergi ucun ○○（左の詞は○○）としている⁷。

訳者尚玉章とはどのような人物だったのか。目下ほぼ唯一の手がかりと言えるのが、刻本『清文虚字講約』（別名『凝華集』）である。この本は満洲語の助詞や接辞を二十章に分けて漢語で説明した文法書で、序に「雍正二年甲辰麦月⁸穀旦 襄平尚玉章 公藻氏自題」とある。この書物は中央民族大学図書館に所蔵されている。

季永海 2009:42-45 でも指摘しているが、文芸作品の翻訳のピークは順治から康熙年間までで⁹、本書はそれより少々遅い。また文芸作品そのものの翻訳ではなく一つの作品から派生したものをさらに満洲語に訳したという点でも異彩を放っている。本書からどのようなことが知られるのかは未知数であるが、研究の初歩としてまず序文と第一章の翻字・翻訳・注釈及び『繡像西廂時藝』との異同の確認を試みたい。

【本書の構成】

- ① 四冊に分かれている。それぞれ巻之一から巻之四に相当する。一冊に五章分を収録している。
- ② 第一冊（巻之一）は序から始まり、次に目録（第一章から第五章までの

タイトルと八股文の「題」にあたる一節を列举)、次に第一章から順に本文（八股文）が始まる。第二～四冊は序がないので目録から始まる。

- ③ 各章の構成は以下の通り。

並香集 卷之〇 （← 各巻の先頭の章のみ巻数が記される）

第〇章

<タイトル>

<七言詩または詞>

<八股文形式>

【凡例】

- ① 満文各行の左端の数字は順に、葉数、表裏、行数を表す。葉数は書かれていないので一巻ごとに筆者が数えたものを記す。
- ② 上から満文、日本語訳、漢文の順に記す。日本語訳は満文の逐語訳としたためやや生硬である。
- ③ 転写の方法はメルレンドルフ式に従う。
- ④ 『繡像西廂時藝』は早稲田大学図書館蔵本を参照した。本書には挾批も見られるが異同調査の対象外とする。

転写と訳注・第一冊（序、目録、第一章）

【序】

01a1 sioi

序

序

01a2 seibeni tokso de sula tehe fonde > mini gucu-i

かつて田舎で意のままに住んでいた時に 私の友人の

向在郷居時 於友人館第

01a3 boode > ciyan hala šū gebungge agu-i araha si

家で 銭という姓、書という名の 大兄の 作った 西

得睹銭子名書所撰西廂時藝¹⁰二十

- 01a4 siyang ši wen orin fiyelen be sabufi > ijaršame
廂 時文 二十章を見て にこにこと笑って
篇 欣然色喜
- 01a5 urgun cira-i buyeme > hiyase de asarafī goidaha >>
喜び 気に入って 箱にしまって久しい
藏諸篋中久矣
- 01a6 ere anara bithe be baicame tuwara ildun de >
この託された¹¹本を調べてみた折に
今藏檢閱書籍
- 01a7 dasame tucibufi hūlaci > mujakū niyalama be urgunjebume
改めて取り出して読めば 大変人を楽しませるもの
出而誦之 奕奕動人
- 01b1 ofi > uthai yenden be amcame wacihiyame narhūšame
であり すぐに興に乗じて 完成させて綿密に仕上げ
遂乗興詳譯一竟
- 01b2 ubaliyambume tucibuhe >> yuwan wei jy-i da ucun >
繙訳して明らかにした 元微之の本来の詩歌は
夫元微之¹²之原唱
- 01b3 tuttu saikan be ongolo ejelefi > ciyan siyang
このように美しさを先に独占し 錢湘
既擅美於前 而錢湘靈¹³之
- 01b4 ling-i wen jang > geli uttu ferguwecuke be arame
靈の文章 またこのように優れたものを作って
新製 復標奇於後
- 01b5 tuwabuha be dahame > terei yebcungge saikan
見せたので その風流で美しく
風流淹雅
- 01b6 icangga hojo bai amtangga ferguwecuke gūnin > yargiyan-i
心に適う美女は直ちに趣のある類まれな心 本当に
真

- 01b7 niyalma be ferguwebuci tesumbi >> uttu ofi mini
人に賛嘆されるのに十分である それで私の
香豔足以移人¹⁴ 故予斯集
- 02a1 ere bithe be > inu utuhai bing hiyang ji bithe
この本を またすなわち並香集の本
亦即名之曰並香集焉
- 02a2 seme gebulehe >> boobai loho edun buraki de burubucibe >
と名付けた 宝剣は風塵にあとかたもなく消えたとして
も
寶劍風塵
- 02a3 beye dubatale baibi suku fuhešere gese oho seme
身が果てるまでひたすらよもぎが転がるようになったと
莫嘆飄蓬於一世
- 02a4 gasarakū > gu-i kin -i alin muke-i mudan be >
嘆かない 玉琴の山水の響を
瑤琴山水
- 02a5 kemuni minggan jalan-i bahanafi gehešere be erembi >>
なお千世に渡って理解して頷いてもらうことを望む
還期賞鑒夫千秋
- 02a6 abkai wehiyehe-i jai aniya > fulahūn meihe > niyengniyeri
天の助けの二年 丁 巳 春
乾隆三年 歲次丁巳 春月（穀吉¹⁵）
- 02a7 biyai sain inenggi > siyang ping bai šang ioi
月の良き日 襄平 無官の尚玉
旦 襄平 尚玉
- 02b1 jang > gung dzoo ši > lo šūn tang bithei boode
章 公藻氏 樂純堂書舎にて
公藻氏 題於樂純堂書舎

02b2 araha
 書いた

【目録】

- 03a1 bing šiang ji bithe > ujui debtelin >
 並香集 第一卷
 並香集 卷之一
- 03a2 fiyelen-i ton >
 章の数
 目録
- 03a3 ujui fiyelen >
 第一章
 第一章
- 03a4 hojo de nioroko >
 美女に心が痺れた
 驚艶
- 03a5 adarame terei genere namašan > irgašara hojo
 どうしてあの人の去り際の 秋波を送った美しい
 怎當他臨去秋波那一轉¹⁶
- 03a6 emgeri narame šaha de dosombi
 一回に夢中になって熟視するのに耐えられようか
- 03a7 jai fiyelen
 第二章
 第二章
- 03b1 tatara boobe baiha >
 泊まる部屋を求めた
 借廂
- 03b2 andubuki seci > niyalma be adarame andubu
 暇を紛らわせたいと 人をどうやってひまを紛らわせる
 待颺下 教人怎颺¹⁷

- 03b3 sembi >>
 という
- 03b4 ilan fiyelen
 第三章
 第三章
- 03b5 mudan de acabuha
 音色に調和した
 酬韻
- 03b6 fu dabali geretele acabume irgebuci >>
 塀越しに夜明けまで調和して吟じた
 隔牆兒酬和到天命¹⁸
- 03b7 duici fiyelen >
 第四章
 第四章
- 04a1 doocan be facuhūraha >
 道場を混乱させた
 鬧齋
- 04a2 bi serengge emu gasara manga > nimere manga
 私というものは一人の患いが重く 病がひどい
 我是個多愁多病身
- 04a3 beye > ini gese gurun be haihabure > hoton be
 身 あのような国を傾け城を
 怎當他傾國傾城貌¹⁹
- 04a4 haihabure arubun de adarame hamire >>
 傾ける容姿にどうやって匹敵するか
- 04a5 sunjaci fiyelen >
 第五章
 第五章
- 04a6 sy be golobuha >
 寺を驚かせた

寺警

- 04a7 fi-i dube de > sunja minggan niyalma be
筆の先で 五千人を
筆尖 敢横掃五千人²⁰
04b1 lasihime geterembuci ombi >>

【第一章】

- 05a1 bing hiyang ji bithe > ujui debtelin >>
並香集 第一卷
並香集 卷之一
05a2 ujui fiyelen >
第一章
第一章
05a3 hojo de nioroko >
美女に心が痺れた
驚艶²¹
05a4 asihan niyalma-i erdemu tacimbi seme saršame gūnin
少年の才芸 学ぶといっても 遊ぶ心を
少年游藝意如何
05a5 ainaki seci > hūwašan-i boo > fucihi-i gung babade
どうしたいと言う 和尚の寺院 仏の宮殿あちこちで
僧院梵宮遍歴過
05a6 akūmbume tuwaha >> holkonde (o:holhonde) enduri gege gu-i
心を尽くして見た 突如 神の娘が玉の
忽遇天仙²²下玉界
05a7 jalan de wasijifi ishunde ucaraha be dahame >>
世界から降りてきて 互いに出会ったので
05b1 giyai yuwan fudasihūlarakū oki seci banjinambio >
解元 気が狂わないでいられるか

解元怎得不風魔²³

- 06a1 adarame terei genere namašan > irgašara hojo emgeri
どうしてあの人の去り際の 秋波を送った美しい
怎當他臨去秋波那一轉²⁴
- 06a2 narame šaha de dosombi
一回に夢中になって熟視するのをがまんできようか
- 06a3 tuwara saikan irgašara de > gūnin ulame oho >>
見つめる美しい流し目を送ったので 心伝えた
美目眇兮 情傳之矣
- 06a4 irgašara hojo serengge > umasi gūninjaci ojongongge >
流し目を送る美人というのは非常に思いを巡らせてよいもの
夫秋波 最足關情者也
- 06a5 geli genere namašan de narame šahabi >> aliha niyalma >
また去り際に夢中になって見つめた 受け取った人は
況轉於臨去時乎 當之者
- 06a6 inu adarame tosome gamambihe ni >> ainci ini
全くどうやって予想して解決するのだ もしあの人の
將愛以為情耶 若曰
- 06a7 gunin > niyalma urui gūnin-i ishunde acingiyarangge >
心が 人に ひたすら心を相互に動かすことなら
人之以情相感者
- 06b1 ai gūnin bifī yabuha be bi inu ulhirakū > damu
どんな心があってやったのかを私は全く悟らなかった ただ
予亦不自知其何心也 第
- 06b2 gunin udu takaci ojarahū bicibe > ini mujilen-i
心をどうしても確かめることができない あの人の心の
情不可見 有顯然直
- 06b3 babe iletu getukeleme tucibuci > terei gūnin hono
経緯をはっきりと明らかに引き出したい あの人の心はまだ

露其哀者 而其情淺矣

06b4 micihyan bihe gūnin udu takaci ojarahū bicibe >
浅くとどまる 心をどうしても確かめることができないけれ
ど

乃情不可見

06b5 ini gūniha babe dorgideri jendukan-i tuwabuci >
自分で考えた経緯をこっそりと密かに見てもらいたい
有隱然微示其意者

06b6 terei gūnin ojarahge teni šumin >> adarame seci >
あの人の心 よきもの 全く深い どうやって
而其情轉深 何也

06b7 bengneli acaha sabuha nashūn > hocikon yasa heni
にわかに出会った機会 美しい目ほんの少し
當猝然邂逅之餘 而凝眸偶矚

07a1 heni šaha deri > ulaki se manggi > geli ularakū oki
熟視したのを通して伝えたいというや否やまた伝えたくない
若欲傳 若不欲傳

07a2 sere gese > jing emdubei hairame naršara de >
というように ひたすらいとおしみひたむきに恋するので
覺有往復流連者

07a3 niyalma sabume murlen derfi bargiyatame muterakū seme
人に姿を見せて心が変化して収めることができないと
令人一望而神馳也已²⁵

07a4 ofi kai >> te bicibe mini ne sabuhangge > tere
いうのだ 今 私のここで見たもの あの
予今之所見 其

07a5 niyalma aifini genehekū semeo >> terei genere onggoro >
人どうして行かなかったと言うか あの人は去る前に
人既去哉 方其未去也

07a6 mujilen-i oki sehe babe minde alahakū bicibe >

- 心の希望を言った経緯を私に告げなかったけれども
未嘗告我以心
- 07a7 uthai genere de cihakūnge > mujilen hungkereme
すなわち行ったのだから気が進まなかったこと 心を傾け
而有不欲遽去者 不啻傾心以相
- 07b1 tucibufi alara ci encu akū de > dalbaki ci
明らかに告げることとは違うので 傍の場所で
告 旁觀有所
- 07b2 tuwara niyalma sarkū dabala > beye teisulehe niyalma >
見守る人を知らないだけだ 身になかった人
不知 而身其際者
- 07b3 aifini dolori ulhihe >> terei jing ginere ucure >
既に密かに悟った 彼女のまさに行く時
已默為喻矣 及其將去也
- 07b4 ini gūnin be umai getukeleme gisurehekū bicibe >
彼女の心を全くはっきりと話さなかったけれども
亦未明言其意
- 07b5 lasha genere jaidarakūnge > gūnin uthai yasai
思い切って行って厄払いはしない 心はすなわち目の
而有不忍俱去者 一若寓意於目中
- 07b6 dolo baktan gese ojoro de > urhilame donjire
中の容れ物のようなので 風の便りに聞くに
傳聞猶多艷
- 07b7 niyalma hono labdu saišara buyere bade > jingkini
人はなお多く賞賛し愛するのに 本当に
羨 而歷
- 08a1 aliha niyalma > ele beye tuwakiyame muterakū oho >>
受け取った人はいよいよ身をわきまえることができないのだ
其境者 亦²⁶難自持矣
- 08a2 terei genere namašan > absi jabšan ni > hocikon(o:hocihon) gege be

- 彼女の去り際　なんという幸せ　美しい娘を
幸哉其臨去也　望伊人之不
- 08a3　hargašame getuke saburakū seci > tere fudere isika >
仰ぎ見ようとしてきちんと見なかったと　彼女を送ろうとす
る時
見　而將送將迎
- 08a4　okdoro isika de jooni ere irgašara hojo de
迎えようとする時に　悉くこの流し目を送る美人では
不盡在此秋波乎
- 08a5　akū semeo >> terei genere namašan > absi akacun ni >
ないというのか　彼女の去り際　なんという悲しみ
傷哉其臨去也
- 08a6　buyecuke gege be tuwame goro genehe seci > tere
いとし娘をじっと見て遥かに行つたと　彼女は
瞻彼美之云遙　而
- 08a7　gaitai　t（判読不能）> gaitai sabubuha de > terei irgašan
たちまち隠れては²⁷　たちまち現れるので　彼女の流し目
乍陰乍見　怎當他秋
- 08b1　hojo emgeri narame šaha de dosombi semeo >>
一回に夢中になって熟視するのを我慢できようか
波那一轉乎
- 08b2　fujurunng yangsangga banin mujakū saikan > arbun be
上品で艶やかな　姿　大変美しい　姿は
丰姿綽約　神已淡
- 08b3　gisureci bolori muke ci bolgo ohobi >> tuttu secibe
言ってみれば秋の水よりも清くなっている　それなのに
於秋水　而
- 08b4　ishunde acaha ucuri > mimbe umai herserakū oci >
互いに会った時　私を全く気につけない
相接之際　莫我首顧

- 08b5 terebe ainara >> te terei irgašara hojo be
彼女をどうしよう 今彼女の流し目を
則無如他何耳 今也覩彼秋波
- 08b6 tuwaci > ini cisui ilibuci ojarahū gūnin serebufi >
見たら 当然抑えることのできない心を知らせて
有不自禁之情
- 08b7 majige andande elden heni seme > majige andaden elden
少しにわかに光がほんの少しと 少しにわかに光が
俄而光稍著焉 俄而光即斂焉
- 09a1 utuhai akū ome > genere namašan de emdubei
すぐになくなる 去り際にひたすら
低徊於臨去者
- 09a2 narašara de > terei emgeri narama šaha de mujilen
思いこがれるので彼女の美しい一回に夢中になり心が
能不傾倒於那一轉乎
- 09a3 farfaburakū ome mutembio >> cin-i šuleo > o-i
乱されないでいることができるか 螭の鬚の毛 蛾の
夫螭首²⁸蛾眉
- 09a4 faitan sehengge > wei gurun-i ši de kemuni šu žin be
眉ということ 衛の国の詩でもやはり美人を
衛風嘗致美乎碩人²⁹
- 09a5 saišambihe secibe > aradame terei emgeri narama
誉めそやしていたというけれど どうして彼女が一回
則何如那一轉者
- 09a6 šahangge heni yasalara sidende gūnin ulara de
眺めたこと ほんの少しちらりと見るうちに心で伝えるので
傳神於阿堵³⁰間也
- 09a7 isimbini >> ildamu haihūngga bethe umesi ajige

- 十分だろうか しなやかで柔らかな足は大変小さい
蓮歩輕盈
- 09b1 wase be tuwaci weren-i oilo heo seme geneci ombi >>
靴下を見ればさざ波の上を意のままに行くことができる
襪亦足以凌波
- 09b2 tuttu secibe ishunde sabuha erin > minbe umai
それなのに互いに会った時 私を全く
而 相値之時 莫予云覲
- 09b3 tuwarakū oci > geli terebe ainara >> te terei
見なかった また彼女をどうしよう 今彼女の
又無知他何耳 今也 眴
- 09b4 irgašara hojo be tuwaci > ini cisui waliyaci
流し目を見たら おのずから放り出すことは
彼秋波 有不自置之意
- 09b5 ojarahū mujilen tucinjifi > tuwarakū oci mimbe
できないという心が現れる じっと見ないということは私を
不視則恐我不知
- 09b6 sarakū ayoo > goidame tuwaci geli weri be aikān
知らないのではないかと しばらくじっと見ればまた別人が用
心深く
焉 久視則又恐人或見焉
- 09b7 sabure ayoo seme > genere namašan de emdubei
現れるのではないかと 去り際にひたすら
徘徊于臨去者
- 10a1 boboršoro de > tere emgeri narame šaha de fayangga
大いに愛惜するので彼女を一回見て魂が
能不魂消于那一轉乎
- 10a2 aljarahū ome mutembio >> saikan ningge yasa
裂かれないでいられるか 美しくあるものの目
夫婉如清揚

- 10a3 faitan sehengge > ši-i niyalma kemuni tere gege be
眉というもの 詩人はいつもその娘を
詩人毎載咏於子
- 10a4 irgebumbihe secibe > adarama terei emgeri narame
吟じていたというがどうして彼女の一回に夢中になって
則何如那一轉者
- 10a5 šahangge an-i acaha ci tulgiyen ishunde
眺めたこと普通に会った以上に互いに
相賞於風塵外也
- 10a6 hajilara de isimbini >> irgašara hojo cohotoi mini
慕ったので十分だろうか 流し目が特別に私の
調秋波專在予乎
- 10a7 jalin seci > narame šahangge genere namašan de teni
ためならば（自分は）夢中で見たが（彼女は）去り際になっ
てやっと
則不應轉於臨去也
- 10b1 isibuci acarakū bihe > irgašara hojo mini jailn
送るべきではない 流し目が私のため
調秋波不在予乎
- 10b2 waka seci > genere namašan de tere emgeri narame
ではないならば （自分が）去り際にあの一回を夢中で
則臨去不應有那一轉也
- 10b3 šahangge fuhali maktaci acarakū bihe >> okson elhe
見たことは全く褒められたものではない 歩みは
步遲遲
- 10b4 elhe julesi ibeneme > gūnin cik cik seme gūninjame >
ゆっくりと前に進み出て 心が憂鬱そうに思い巡らせて
其欲往 意默默其難忘
- 10b5 fujurunga yangsangga sain sargan jui > inu niyalmai
上品で艶やかな良き女の子は また 人の

- 窈窕淑女 亦似撩人

10b6 fakcaha seyecun be aššabuki seme ere irgašara
別れの悲しみを起こしたくて この秋波を送った
之離恨 而為此秋波

10b7 hojo be deribuhe gese >> irgašara hojo > genere
美人を起したように 秋波を送った美女が去り
也者 謂秋波無心於臨去乎

11a1 namašan de maktara de gūnin akū seci > ai turgunde
際に投じたのは意図的でないならば どういう理由で
胡為而多

11a2 ere emgeri narama šaha be fulu tucibuha ni > genere
この一回の熟視を余計に引き出したのか 去り
此一轉也 謂臨

11a3 namašan de > irgašara hojo isibuhangge gūnin bifi
際に 秋波を送ったのは意図的である
去有心於秋波乎

11a4 seci > adarama ini tere emgeri narama šaha de
ならば どうして彼女のあの一回を夢中になって眺めずに
則怎當他那一轉也

11a5 dosome mutembi ni >> bi hūlaki seci gelhun akū
いられるか 私は呼びたいと言っても敢えて
我欲招而不敢

11a6 hūlarakū > i waliyaki seci waliyame jenderakū > tere
呼ばない 彼女は放り出したくてもできない あの
他欲忍而不能 彼

11a7 saikan gege > inu niyalmai duha lakcaha jalin
美しい娘 また人（私）の断腸のために
美人兮 亦似惧人之腸斷

11b1 geleme jortai tere emgeri narama šaha be deribuhe
心配してわざとあの一回を夢中で見るように策を立てた

而故為那一轉也者

- 11b2 gese >> saikan niyalma-i gūnin halhūn de baniha
 ようだ 美人の心が暖かいのに感謝を
 謝佳人之有意
- 11b3 buki > okson udu guricibe gūnin aifini ferihe >>
 与えたい 歩みがどれだけ移動しても心はもはや熱望してい
 る
 玉雖移而神已留
- 11b4 bithei niyalma mini hon moyo de korsombi > beye
 書生の私ははなはだ鈍いので恥ずかしい 身が
 愧書生之不才 形
- 11b5 udu giyalabucibe mujilen lashalame muterakū >> ai
 どれだけへだてられても心は断ち切れない ああ
 雖隔而情難已 噓
- 11b6 adarama dosombi ni >>
 どうやって耐えようか
 怎當乎哉
- 11b7 yebcungge saikan > nemeyen icangga > fi aššame mudan
 麗しく美しく 柔らかく心に適う 筆が動いて音色が
 風流宕漾 揮毫韻生
- 12a1 banjinaha >> ere gese banitai šungge bithei niyalma be
 生まれた このように本性をよくわかっている書生を
 視此慧業文人
- 12a2 tuwaci > giyan-i abkai de banjici acambi >>
 見たら 道理に従って はっきり生きるのがふざかしい
 應生天上
- 12a3 an -i jergi urse dogon fonjiki seci > hon unde >>
 凡人の渡し場を問いたい はなはだ また
 那許俗子問津³¹

参考文献

【日文】

寺村政男、荒木典子、鋤田智彦 2012 『『満漢合璧西廂記』の総合的研究・その3』、『水門』第24号:1-27。

大木康 2006 『原文で楽しむ明清文人の小品世界』 集広舎。

【中文】

黄强 2009 〈八股新编 文学别调——论游戏八股文的文学意蕴〉,《晋阳学刊》第4期:104-109。

黄强 王颖 辑校 2009 《游戏八股文集成》 武汉大学出版社。

季永海 2009 〈清代满译汉籍研究〉,《民族翻译》第三期:41-49。

*本研究は JSPS 科研費 JP16K21261 の助成を受けたものです。

¹ 内藤文庫・第十二小説家類・二異聞之屬。

² <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/N0020001.html?big?1> 最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日。

³ 寺村・荒木・鋤田 2012:1 で簡単に本書を紹介している。

⁴ 『西廂記』は、もともと元の時代に作られた雑劇であるが、これが明代の後期に至って爆発的に流行する。伝田章『増訂明刊元雜劇西廂記目錄』(東洋学文献センター叢刊 影印版 四 汲古書院 一九七九)によれば、明代だけで六十六種類の『西廂記』の版本があったことがわかる。八股文が作られるためには、その題目が、誰からもよく知られていることが前提になる。『四書五経』についてはいうまでもないが、『西廂記』の場合も、こうした条件を十分に満たしていた。文辞の美しさも、十分経書と対比されうるものであった。(大木 2006:23)

⁵ 蘇州。

⁶ 大木 2006:45-46 に拠れば、『西廂記』金聖嘆本の最初の形と考えられる『貫華堂第六才子書』には「六才西廂文」と題する二十篇の『西廂記』による八股文が収められており、銭書はこれを見て(金聖嘆も銭書も蘇州の人である)、そのうちあるものについては添削を加え、またあるものについては自ら新たに筆を取り、刊行したものが『西廂時藝』だという。

⁷ あまり見かけない処置である。例えば『満文金瓶梅』では第二回の冒頭の詞の

後に ere mudan-i gebu hiyoo-šun-ge（この曲の名は孝順歌）と記している。この部分には漢文は併記されていないが、筆者が底本の可能性が高いと考えている崇禎本系統の北京大学蔵本や天津図書館蔵本などでは「右調孝順歌」としている。

⁸ 麦月:農曆四月。

⁹ 漢籍翻訳の趨勢をおよそ以下のように説明している。

（一） 入関前 ホンタイジが軍事、法律制度、歴史に関する漢文の著作を儒臣に命じて翻訳させた。この中には『三国志演義』も含まれていた。訳されたものは八旗に広く伝わり、入関のための思想上、軍事上の準備に供された。

（二） 入関後 翻書院が設立された。入関後の訳書は、第一に四書五経、歴史、軍事などの著作、第二に文学作品に分けられる。

…文学作品は主に小説、戯曲、散文、詩歌などが翻訳された。清代の三百年の歴史において満文による創作小説や戯曲は作られなかった。よって大量の漢語文学作品を翻訳することで満族の娯楽とすることが清代前期の流行となった。

¹⁰ 時藝:八股文の別名。「時文」ともいう。

¹¹ ana- は、押し広げる、押し出す、押し付ける、託すなどの意味。漢文部分には相当する語がない。

¹² 元稹。『西廂記』のもとになった『鶯鶯伝』（一名『会真記』）の作者とされる。

¹³ ここでは前出の錢書を指すか。

¹⁴ 移人:人の精神状態を変える。

¹⁵ この二字は墨で塗りつぶされている。

¹⁶ 各章の後に『西廂記』から抜き出された短い文が添えられている。これらは本文において冒頭に書かれ、八股文の「題」に相当する。第一章のこの文は、『満漢合璧西廂記』の文では先頭に「我」bi とある以外は満漢共に一致している。

¹⁷ 第二章の「題」。『満漢合璧西廂記』の文と満漢共に一致。

¹⁸ 第三章の「題」。『満漢合璧西廂記』の文と満漢共に一致。

¹⁹ 第四章の「題」。『西廂時藝』では「我是多愁多病身，怎當你傾國傾城貌」とする。『満漢合璧西廂記』第四章の文は「我是個多愁多病身，怎當你傾國傾城貌」bi serengge emu gasara manga > nimere manga beye > sini gese gurun be haihabure > hoton be haihabure arubun de adarama hamire となっている。

²⁰ 第五章の「題」。『西廂時藝』では「筆尖兒敢橫掃五千人」。『満漢合璧西廂記』第五章では「筆尖兒敢橫掃了五千人」ere fi-i dubede uthai sunja minggan

niyalma be lasihime geterembuci ombi となっている。

²¹ 章のタイトル。『西廂時藝』では詩詞の末尾に書かれている。

²² 仙:『西廂時藝』では「僊」とする。

²³ ここまでは『西廂記』第一章の内容を詠んだ詩である。ただし、早大本『西廂時藝』は第一篇と第四篇の冒頭の一葉が入れ違っている。第四篇冒頭に綴じられている葉にはこの詩が見える。

²⁴ 注 16 を参照。

²⁵ 『西廂時藝』ではこの後に「如」とある。

²⁶ 亦:『西廂時藝』では「益」とする。

²⁷ 満文が判読不能なので漢文から日本語訳した。

²⁸ 「螭」は蟬の一種。体は小さく、角張った頭部は額が広く、美しい模様が
あるため、「螭首」は美人の美しい額の意味。「首」には「毛」の意味もあるので満
文はこのように訳したと考えられる。『詩経』衛風・碩人「螭首蛾眉、巧笑倩
兮、美目盼兮」(広き^{せみびたい}螭首 美しき蛾の眉、うち笑まるる御口元のあでやかさ、
つぶらなるおん瞳のすずしさ)この日本語訳は中国古典文学全集 1『詩経・楚
辞』p.58 (目加田誠・訳)を参照した。

²⁹ 齊の莊姜を詠んだ『詩経』衛風・碩人より美人の意味。

³⁰ ここでは瞳の意味。

³¹ 「風流～問津」は『西廂時藝』では改行して書かれており、本文ではない。
各章の末尾にある。黄・王 2007 :17 に拠れば「各篇に対する評語」で、『西廂時
藝』に序を書いた一人の鄭鵬挙によるものだという。

訂正 (2020 年 3 月 13 日)

p.25 乾隆三年

補注 満文 jai aniya=二年 と対応していないが、「丁巳」ならば二年が正しい。

p.28 04b1

日本語訳を追加

字を書いて除くことができる